西欧のこころをたずねて

手塚富雄

燈影撰書 12

燈影撰書 12

西欧のこころをたずねて

手塚富雄

著者略歴

手塚富雄（てづか　とみお）

1903年　宇都宮市に生まれる。東京大学文学部独文学科卒。松本高等学校教授を経て東京大学教授，東京大学名誉教授，立教大学教授。文学博士，日本学士院会員。1983年没。

燈影撰書 12

昭和63年6月10日印刷　昭和63年6月15日発行

西欧のこころをたずねて

定価 1,700円

著者　手塚富雄

発行者　三上皓史

発行所　一燈園燈影舎
京都市山科区四ノ宮川原町21
TEL 075-581-5104

印刷所　株式会社燈影舎
京都市山科区四ノ宮川原町21
TEL 075-581-2901(代)

ISBN4-924520-23-3 C1110 ¥1700E

＜目　次＞

ボンからのたより
その一……6
その二……14
子供が目につく……37
ドイツの子供のしつけ……40
大学生のしずかさ……44
ドイツの復興とその精神的基盤……47
アデナウアーの演説……54

ドイツ人ありのまま……58
三つの答え……63
ハイデガーとの一時間……73
二人の詩人……83
パリの無国籍詩人……107
朗読会の詩人……117
ベルリンの文学者たち……123
ドイツ詩人の跡をたずねて
シュトルム……131
メーリケ……138
サン・モリッツの旅……146

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

東と西の問題……156
文学問題か文化問題か……160
おどろいたこと二つ三つ……164
日本の新聞のこと……167
ギリシャ的メランコリーによせて……170
現在の日本文化の問題点……186
解説……高橋英夫……202
編集後記……211

西欧のこころをたずねて

ボンからのたより

その一

一九五三年七月二十五日――ボンにて。

今日はH君といっしょにボンの労働者街をあるく約束である。H君はアルバイトだけでやっているという大学生。父親は戦時中病死し、母親と妹は故郷の町にいるが、彼は父の生きているうちから、独立して、大学のコースをめざし、いまはあと一年で学業完了というところ。いまの彼の収入の根幹は、大学研究室での図書出納事務によってもらう手当てである。この事務は五人の学生が交代でやっている。これはただの事務的傭いではなく、給費の一形式であるらしい。ほかに、休暇中仕事をみつけてかせぎ、それで大学開講期の生活費をうめる。休暇中の仕事は、わりあい見つけやすいという。そういう学生をめあてにして提供される職場がある。たとえば市電の従業員たちの賜暇中の代用とか、休暇中はとくにいそがしい観光地での説明その他の手つだい仕

事など。また書物の販売員の募集もみかけたことがある。H君は、建築作業のレンガはこびもやったことがあるそうである。そのくらいのことはできそうなからだつきである。そんなわけで、彼は貧乏生活には縁もあり理解もある。クッタクの様子はみえない。どちらかというと単純な人柄であるが、人前では堂々としている。H君には、もう一つ趣味と内職をかねた特技がある。彼はアコーディオンをもっていて、同志数人と音楽のグループを作っている。そして近村のキルメス（村祭り）などには、音楽手としてたのまれていくことがよくあるそうである。それは直接の契約によるのかときけば、あいだに仲介業者があって、それに申しこんでおけば、口がかかってくるのだ、と説明した。

労働者街というのは、ボンの旧市街の方にある。どこでも旧市街というのは、貧乏町のものだ、とH君はいった。私は彼につれられて、いままで通ったこともない道筋のほうにまがると、繁華街とちがって、戦災の建物の廃墟が、まだたくさん目につき、ところによってはひろい焼野原がある。ある廃墟の建物の二階は、人の住めるように修復されているが、下の階はそのままになっている。また、全然修復の手がついていない廃墟のほんの片隅の部分を、ありあわせの板でかこんで、人の住んでいるところがある。そういう一つから、よごれたシャツをきたハダシのおさない子供が出てきた。そのまま道ばたに立って、遊び仲間をさがす様子であった。「家も不足なの

ですが、一つには、こういう人はもうこうしてここに住みついてしまって、移ろうともしないのですね。積極性がないのです。」復興景気とでもいうべきものの盛んなドイツでは、すこしグズグズしているものは、落伍者あつかいにされるように思えた。

くもっているせいもあり、あるいていても暑さはすこしも感じない。だんだん商店のある通りに出てきた。旧市街で労働者が多く住んでいるところといっても、さして他の街と変っているようには見えない。ただ人出が多く、なんとなくこみあっている感じである。それから、二階や三階の窓をあけて、おかみさんたちが町を見おろしている。その数は非常に多い。体軀堂々としたおかみさんたちが、腰に手をはったりして、威張った顔で、そんなふうに油を売っているのは、なんとなく街の様子にくつろぎをあたえている。

「住宅街では、こういうことはほとんどないでしょう。これは、こういう街の典型的特徴です。一日じゅうでもああやって見ているのです。」

そういう見物好きのおかみさんたちの眼が、一ように或る方向にそそがれているところにきた。近くの町角に人だかりがしていて、その中から太鼓まじりの音楽がきこえてくるのであった。子供や大人たちのうしろからのぞいてみて、私はそこにちょっと面白い辻音楽師の姿を発見した。さまざまの楽器の音が、たった一人の手で鳴らされているのである。子供のころ故郷の町で見た

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

ことのある七人芸というのとまさに同族で、昔なつかしさをさそわれた。両手と口はヴァイオリンと大型ハーモニカにむだなく使われているが、背中に大太鼓をせおい、長靴ばきの足を踏むと、ベルトじかけでバチがそれをたたくようになっている。帽子のとんがりには鈴がついていて、まをおいてこれが振り鳴らされる。このおもしろい音楽もながくはつづかなかった。切れめが来たらしい。太鼓をせおった姿で向うへ移っていった。

「あれは子供たちになにか売るのだろうか。」

「いや、音楽だけです。子供が親から金をもらって、それをやります。それから窓のおかみさんたちが、よく金を投げてやりますよ。住宅街でやったのでは、とてももらいになりませんがね。」

音楽師の行く手には、たしかに高い窓から紙につつんだ小ぜにが投げられた。

「辻音楽師がこういう町で好かれるのは、ひとつは、かれらがみんなの好きな曲、多くは哀傷の勝ったものを奏するからです。もうひとつは、労働者たちには、ああいう芸人にたいして《あいみたがい》の気持があって、それで金をやるのですね」とH君は説明を追加した。

さらに歩いてゆくと、今度はただならぬ光景に出逢った。ある家の扉口から、大声でわめいている三十なかほどの男が、二人の巡査に手をとられてひっぱっていかれつつあるのであった。その男の顔は真赤になっていて、このまひるまから酔っぱらっているのだなと私は思った。巡査の

ひっぱってゆく方向には、消防車に似たような特別な自動車が待っていて、これは警察署専用の保安車というのだそうである。警官たちの目標は男をその保安車に乗せることにあるのだが、男はたえずどなり、抵抗して、なかなかその車にたどりつかない。警官はむつかしい顔をしているが、べつに怒声を発するのではない。ただ辛抱づよく、その男をつかまえて、車にちかづけて押しあげようとするのである。日本では、いまはそうではなかろうが、以前はこんな場合は警官の方でも大いに怒って、なぐりつけるぐらいは普通のことだったように思える。これも私の子供のころの実見であるが、留置場を逃げ出した男を数人の巡査が追っかけて、とうとう道なかでつかまえて、つかまえたのだからもうよさそうに思えるのだが、総がかりでさんざんに罵声を発してこれでもかこれでもかとなぐりつけていた。いま私の見ているドイツの警官は、おそろしくいかめしい顔をしているが、そういう暴力行為には出ない。かってに男にどならして、自分たちは無言でこの男を警察へつれてゆく事務だけを遂行しようとするのである。とうとう警官が四人になって、男は保安車の後部に押しあげられた。そこはただ真四角な空間であるが、腰掛はついている。男はそこに腰かけさせられてからも、たえずどなっていた。彼の動勢は、彼が連れ出された家の扉口の方へもどることである。だからその罵声は、彼の身体が車上におさまってからも、もと来た方向に向いているのである。私におもしろく思えたのは、警官におそれいるという気配がその

男にすこしもないこと、警官のほうでも彼をおそれいらそうとはしていないことである。保安車にのってからも、彼はいっこうおどおどせず、そのどなりかたにも、凪ぎがこない。こんなところが、やはり人権自覚の程度のちがいというものなのだろうかと、私はひそかに考えた。

ただでさえ物見高い街であるから、この光景には、あたりの窓という窓があいて、見おろしているのは当然のことである。街中にも、あちこちに人だまりができて、評議をしている。年寄りたちが窓から厳粛な顔を出して、首をふっているさまは、何事も秩序のためには仕方がない、といったような表情である。ニッコリともしないで、市民の良風美俗を一身にせおったように見える。この人たちは、日常生活における裁き手で、すべての裁き手がそうであるように、同情心はおもてに見せない。そしていつも高みから見る人がそうであるように、非常に安全な立場にある。

これまでのところでは、この大声を出している男が、どういうわけで警察へつれていかれるのか、はっきりしなかった。どうしたのだろうとわたしが問うまでもなく、H君はあちこちに耳目をはたらかして、評議をしている群衆のそばに近よったりした。

「わかりましたよ。」と、もどってきて、私に移動をうながし、あるきながら話した。保安車はもう去っていた。

「あの亭主は毎日仕事に出ているのですが、今日はどうしたはずみか、いつもより早く帰って

きたのですね。ところが細君の不貞を発見した。部屋にはいると、動きのとれないところであったのですね。それで亭主がフンガイして大騒動になった。すると同じ建物に住んでいるほかの家族たちが、そういう騒ぎは、秩序の妨害だといって警察に電話をかけ、それで保安車が出動したのです。理由はどうでもあれ、大声を発して近所にめいわくをかけるものは法にふれる。悪いのはあの男です。それでつれて行かれたのです。」

「相手は？」

「細君や相手の男は、騒ぎ立てられた被害者ですから、これは法にかかりません。」

H君の顔には、その矛盾のおかしさをかくさない微笑がうかんだが、口だけは、厳粛な既成市民法の立場をとった。秩序の外形を重んずる側である。ただし、「巷の挿話ですね。ラーベなら書きましょう」と、文科学生らしい一端をのぞかした。

せまい通りにはいると、ビール店や安料理屋がいくつかあって、かなりの繁盛である。ほろよいきげんの二、三人が、街中に立ってムダ話をしている。だが通行人をからかうようなことはない。きょうは土曜なので、こういう連中が多いのだ、とH君はいった。

これでだいたい一巡したわけだが、ばくぜんと思っていたよりは、はるかに小ぎれいな、とのった街筋で、ひとりで来たのでは、べつに労働者街などとは思わないだろうという感想を、私

はH君にのべた。

「ボンは工場町ではありませんから。だが、ルール地方などに行けば、いかにも労働者街らしいところがあります」とH君はこたえた。それにしても、とおぎなって、こういうところでは、一つの建物に住む家族数が多い、と彼は家々の扉口の名札を私にしめした。普通の住宅より、いくぶんそれは多かった。それから道に面した建物のすぐ裏側に別の家があるのも、こういうところの特色だといった。これは「ヒンターハウス」といって陰気な住居である。H君の話はもう一つ屈折して、いまのドイツでいっとう懐具合がいいのは、労働者階級である、という問題に移った。いま町におそろしい音をたててバッコしているオートバイの所有者の多くは、労働者である。労働者というと、ひくい生活をしていると思いこむのは、昔のことである。現在では、女工にはいって最初の見習い時代でも、三〇〇マルク二万六千円ほどとるのである。いまいっとうあわれな生活を送っているのは知識階級、すなわち頭脳労働者にほかならない。これは修業年限においては、労働者と比較にならないくらい長時日を要する。しかもかれらを待っているのは、就職難と薄給である。大学人をめざすものなどは、お話にならないみじめさをしのぶ。しかも組織をもたない知識階級には、改善のめあては、当分ない……。この種の言葉は、私はかなり何度もいろんな人からきいているので、H君のいうことを誇張とは思えなかった。H君は私を、この町の一

隅にある安酒場へ案内した。

その二

一九五三年十二月二十八日――ボンにて。

K君

とうとう約束によって、ドイツの演劇のことを報告することにする。ベルリン、ハンブルグ、ミュンヘン、ウィーンなどをまわって、かなりの数をみたから、これ以上約束をほうっておいては、怠慢ということになろう。もっとも、ドイツで名声の高い劇場総監督（インテンダント）グリュントゲンス Gründgens がドュッセルドルフで活動していて、これはボンからわりに近いから、いつでも行けるという気持と、とくに彼の傑作というときに見たいと思っているところから、まだ一度も行っていない。この報告には、そういう留保はあるものと承知してもらいたい。

ベルリンとウィーンへ行って、そこで耳目にはいる最も緊要な現実問題、東西の分離対立については一言ものべず、すぐ劇の話をするのは呑気すぎるようだが、その方はいい出すときりがなく、それについては気力をあらたにして報告する機会があろう。しかしこういう大都市の劇壇が、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook